

https://farid.ps/articles/rainbow_flags_wont_conceal_genocide/ja.html

虹色の旗ではジェノサイドを隠せない

2023年末まで、私はTwitter/Xのプロフィールに虹の旗——クィアの誇りと連帯の象徴——を掲げていた。しかし、ガザとパレスチナの人々のために公に声を上げ始めた途端、そのシンボルは私に対して武器として使われた。事実に基づき理性的な議論の代わりに、私の投稿には私を貶め、沈黙させるための個人攻撃が殺到した。心配を装ったものもあった。「ガザでゲイに何をするか知ってるだろ」。直接的で残酷なものもあり、「Queers for PalestineはKFCのための鶏みたいなもの」といったミームや、私がそこに行けば「屋上から投げ落とされる」という陳腐な決まり文句が繰り返された。これは多くの人々が共有し、裏付けられた経験だった。

このナラティブは単に還元主義的ではない。それは政治的に操作的であり、歴史的に不誠実で、事実的に誤っている。ガザでクィアの人々が屋上から投げ落とされて処刑されるという繰り返される主張は、パレスチナ人やガザの統治当局に関する検証済みの事例に一切基づいていない。それはISISのプロパガンダ動画から来ており、ハマスからではなく、ましてやより広範なパレスチナ人口からではない。クィアの人々の公開処刑が批判者が示唆する方法で行われたという信頼できる証拠は存在しない。

私たちが目撃しているのはピンクウォッキングの教科書的な事例である。LGBTQ+の権利を正義のための闘争を逸らしたり無効化したりするために利用するものだ。これはクィアの人々に、クィアの権利かパレスチナ解放のどちらかを選ばなければならないと言うレトリックのトリックである。

同性愛とイスラム：武器化されたナラティブを超えて

パレスチナを支持するクィアの人々に対するレトリックの攻撃の多くは、イスラムとLGBTQ+の人々に対するその例外的な敵意についての広範な一般化に依存している。含意は、クィアのアイデンティティとイスラムの信仰が本質的に相容れないものであり、ムスリム多数の人口との連帯はLGBTQ+の人々にとってナイーブまたは自己破壊的であるというものだ。

この枠組みはイスラモフォビア的であるだけでなく、歴史的・神学的にも持続不可能である。伝統的なイスラムの法学は、多くの宗教的法体系と同様に、同性間の行為を抑止する。コーランはルート（ロト）の民を言及し、しばしば男性間の性的行動の非難として引用される。しかし、これらの節は提示されるよりもはるかに曖昧である。それらは**不親切、強制、腐敗**に焦点を当てており、合意に基づく愛や性的アイデンティティではない。ヘブライ語聖書のレビ記20:13——「男が女と寝るように男と寝るなら、両者ともに忌むべきことをした。彼らは必ず死ななければならない」——とは異なり、コーランは**同性間の親密さ**に対する罰を定めていない。

ハディース（預言者ムハンマド、平安あれ、に帰せられる言行）は、イスラムの法の多くを形成し、同性間の行動への多様でしばしば議論のある言及を含む。重要：預言者の生涯中に同性

愛で罰せられた記録はない。イスラムの倫理は伝統的にプライバシー、慎み、悔い改めを強調し、監視や公の屈辱ではない。

実際、イスラムの文明はジェンダーとセクシュアリティに関して豊かで複雑な歴史を持つ。古典的なアラビア詩はホモエロティックなイメージに満ちている。スーフィーの神秘主義は、神聖な愛のメタファーでしばしば厳格なジェンダー境界を超える。スコット・シラージュ・アル=ハック・クーグルやアミナ・ワドウードのような学者は、ルートの物語の進歩的な再解釈を提供し、それが強制的な性的暴力ではなく合意に基づく同性愛を非難すると主張している。

この解釈の多様性は理論的ではなく、生きている。クィアのムスリムは存在し、組織し、抵抗し、繁栄する。パレスチナ支持のクィアの人々を貶めるためにイスラムを武器化することは、これらの声を消すだけでなく、信仰の伝統全体を文化戦争の棍棒に還元する。

犯罪化の植民地主義的根：輸入されたホモフォビアのタイムライン

制度化されたホモフォビアがアラブまたはイスラムの社会の固有の特徴であるという考えは、精査の下で崩壊する。歴史的記録は、**前近代のイスラムの法体系はヨーロッパと同じ方法で同性愛を犯罪化しなかったことを示す**。代わりに、アラブ世界での反LGBTQ+法のコード化は**ヨーロッパの植民地主義**に遡り、コーランではない。

イスラムの支配の数世紀——ウマイヤ朝からオスマン朝まで——同性間の親密さを禁じる統一された刑法は存在しなかった。社会的態度は保守的かもしれないが、宗教学者は様々な行動の道徳について議論し、これらの社会の法体系は**私的な性的行動の監視を優先することはほとんどなかった**、特に公的秩序を脅かさない限り。また、アラブ・イスラムの豊かな文学・芸術的伝統——ホモエロティックな詩、親密な男性の友情、同性間の欲望の描写に満ちている——は複雑で時に矛盾する文化空間を明らかにするが、**ヨーロッパのようにクィアの人々の法的迫害によって形成されていない**。

対照的に、**キリスト教ヨーロッパ**では、同性愛行為は積極的に犯罪化され、しばしば死刑の下に置かれた。中世および近世初期の法体系——異端審問から英國のコモンローまで——「ソドミー」に対して焼身、絞首、切断を含む恐ろしい罰を定めた。ドナウ川沿いのハプスブルク領土などのいくつかの地域では、歴史的資料は同性愛の疑いのある者を船を上流に漕がせる——疲労と露出による処刑——に処したと記述する。これらの罰は周辺的ではなく、**制度化され、教会と国家の両方によって承認された**。

ヨーロッパの勢力がアラブ世界を植民地化したとき、これらの法コードを輸出しました。パレスチナは主要な例です：

時期	パレスチナにおける同性愛の法的地位
1917年以前	オスマン法の下で犯罪化されず
1929年	英國委任統治が第152条（反ソドミー）を導入
1951年	ヨルダン刑法の下で西岸で非犯罪化

時期

パレスチナにおける同性愛の法的地位

1967年-現在 ガザは英國植民地時代の立法を保持；1994年以降の既知の訴追なし (HRW)

この歴史的弧は決定的である：パレスチナにおけるクィアの人々の法的迫害は英國の支配の下で始まった、イスラムの統治ではない。今日、ガザは技術的に植民地時代の法律を保持しているが、数十年にわたりそれに基づく訴追は記録されていない。一方、イスラエル国家はしばしばクィアの避難所として称賛されるが、パレスチナのクィアクライアントの99%以上に庇護を拒否した。この対比は「ブランド・イスラエル」の空虚さを露呈する——LGBTQ+の権利を使って占領とアパルトヘイトを隠すナラティブである。

この歴史を理解することは重要である。それはクィアに優しい西側とホモフォビックな東側の間の文明的溝を仮定する単純なナラティブに挑戦する。また、アラブおよびムスリムのクィアの人々の主体性を再確認し、彼らは自文化の被害者ではなく、**国内の抑圧と輸入された植民地主義的暴力の両方の生存者**である。

アラン・チューリング：西側の鏡

クィアの存在の犯罪化の残酷さと不条理を完全に理解するには、20世紀の最も悲劇的で啓示的な物語の一つを見るだけで十分である：アラン・チューリングの物語。今日、チューリングの名前はチューリングテスト——人工知能の基礎概念であり、現代のCAPTCHAシステムの基盤——で世界中に知られている。しかし、彼の真の遺産ははるかに深い——彼は**ドイツのエニグマコードを解読する機械を設計した輝かしい数学者兼暗号解析者**であり、第二次世界大戦での連合国への決定的な貢献だった。

ブレッチャリー・パークでのチューリングの仕事は何年も機密だったが、今日では彼が**戦争を最大2年短縮し、数百万の命を救った**ことが明らかである。どんな公正な社会でも、彼は国民的英雄として祝われ、生前に敬われ、感謝と敬意を持って記憶されただろう。しかし、アラン・チューリングはゲイだった。そして1950年代の英國では**それは犯罪**だった。彼の時代の多くのゲイ男性のように、チューリングは二重生活を強いられ——家からこっそり抜け出し、パートナーと秘密裏に会う。

チューリングが自宅の強盗を報告し、最近のパートナーであるアーノルド・マレーの関与を疑ったとき、最終的に警察の尋問中に彼らの関係を明らかにした。盗まれた物品のルーチン調査として始まったものが、急速に「**重大な猥褻行為**」の起訴に変わった——オスカー・ワイルドを破壊したのと同じ容疑だ。事件が制御不能になったのを見て、主任刑事は後にチューリングに謝罪し、彼の協力が止められない司法機械を起動させたことを悔やんだ。

戦争奉仕と科学的才能にもかかわらず、チューリングは裁判にかけられ有罪判決を受けた。裁判所は選択肢を与えた：投獄か化学的去勢。彼は後者を選んだ——リビドーを抑制するための合成エストロゲンを含むいわゆる「治療」。副作用は恐ろしかった。チューリングは**女性化乳房（乳房の発達）、うつ病、精神的衰退**に苦しんだ。かつてファシズムからヨーロッパを救った活発な精神は、今や国家承認の残酷さによって侵食された。1954年、わずか41歳で、チューリングはシアン化物に浸したリンゴをかじって自ら命を絶った。

数十年後、公的憤激と遅い国家的清算の後、チューリングは死後の王室恩赦を受けた。しかし歴史は取り消せない。すべてを与えた国が恥と罰で返した男は失われた——戦争ではなく、社会を守ると主張する法律によって。チューリングの物語は単なる悲劇ではない——それは告発である。LGBTQ+の生活の犯罪化は決して保護についてではなかった。常に制御、恐怖、欲望の監視についてだった。そして今日、西側の声が他の文化をホモフォビアで非難するとき、それは選択的記憶で行う。チューリングを殺した法律はロンドンで生まれ、メッカではない、そして彼の死は西側の道徳的優位性の神話を厳粛に反駁する。

ジェンダー暴力と文明化された家父長の神話

西側の解説者がアラブおよびムスリムの社会を人権問題で独自に「野蛮」または「遅れている」と枠組みするとき、彼らは歴史的誠実さからほとんど話さない。これは単に誤解を招く——それは投影である。今日道徳的優位性を主張する同じ社会は、驚くほど最近まで、自らの法体系内で深く暴力的で家父長的な規範を維持した——しばしば国家の力で裏打ちされた。

例として家庭内暴力と婚姻強姦のテーマを取ろう。アラブおよびムスリムの社会では、常に家父長構造があった——すべての文化のように——が、男性が妻を殴ったり性的に強姦したりする無制限の権利を持つという考えは社会的に受け入れられなかった、たとえ常に犯罪化されていなくても。男性がこれらの線を越えたとき——妻を殴り、子供を傷つけ、暴力的行動を取る——彼の行動はしばしばコミュニティの介入に直面した。長老、家族、または同輩が彼を対峙し、持続すれば、妻と子供は大家族、友人、または近隣に避難でき、社会的恥なしに。

明確だった：特定の行動は単に男性を家族の長に値しないものにした、国家の介入とは無関係に。

これを20世紀初頭および中頃のヨーロッパと北米と比較せよ。英国、フランス、米国のような国では、法律は夫の「婚姻権利」を認め——婚姻強姦の婉曲表現で、多くの西側諸国で20世紀末または21世紀初頭まで犯罪として認識されなかった。英国では婚姻強姦は1991年まで合法だった。米国のいくつかの部分では1990年代またはそれ以降まで。これらの法律は虐待を許可するだけでなく——それをコード化した。

妻と子供への身体的懲罰は単に容認されただけでなく——公に促進された。男性は家族への法的権威を与えられ、規律としての暴力は私的でさえ責任あるその力の行使と見なされた。男性は「口答え」で妻を殴り、自治を否定し、法的外部世界から隔離できた。虐待的な夫から逃げる女性は子供、財産、社会的地位を失うリスクを負った。これは古代史ではない。これは第二次世界大戦中および後の法律で、同性愛を犯罪化し、グローバルサウスを植民地化し、世界に文明の基準であると告げた同じ国々で。

したがって、現代の西側批判者がLGBTQ+または女性の権利をアラブまたはムスリムの社会に対する西側の道徳的優位性の証明として持ち上げるとき、偽善は驚くべきものである。これらの権利は西側自体での最近で激しく闘われた発展であるだけでなく、枠組みは非西側社会で世代にわたり存在した文化的根ざした責任システムを消す。この文脈の消去は偶然ではない。それは西側の勢力が自らの歴史と植民地化した社会に与えた損害を無視しつつ、文明的リーダー

シップの幻想を維持することを可能にする——かつて保護を提供したコミュニティ構造をしばしば破壊または変位する。

ピンクウォッキングを国家芸術として

2005年に外務省が開始した「ブランド・イスラエル」キャンペーンは、テルアビブをゲイに優しい港として明示的に宣伝した。この努力は有機的な誇りではなかった。それは**国家プロパガンダ**だった。海外で虹の旗を振りながら、イスラエルは地元LGBTQ+サービスへの資金を削減し、占領下のパレスチナ人を抑圧し続けた。**ブラック・ランドリー (Kvisa Shchora)** のようなイスラエルのクィアグループはこの流用に抗議し、アパルトヘイトを白く洗うためにアイデンティティを使用されることを拒否した。ブラック・ランドリーの活動家が言ったように：

「占領された土地でプライドを祝うことはできない。私たちの解放は他国民の抑圧の代償に来ることはできない。」

同様に、**alQaws**や**Palestinian Queers for BDS (PQBDS)**のようなパレスチナのクィア組織は長年ピンクウォッキングを拒否してきた。PQBDSは宣言した：

「私たちの闘争は人種差別国家への包含ではなく、その解体である。」

これらの声は西側の主流議論でほとんど聞かれず、クィアを軍事主義を正当化するためにトーケン化することを好む。

したがって、西側の声がアラブおよびムスリムの社会をLGBTQ+の人々の扱いで嘲笑または非難するとき、それは現場のクィアとの連帯からではない。より頻繁に、それは**イスラモフォビックなトロープ**として機能する——ムスリムを修復不能に不寛容で自己決定に値しないと描写する方法である。それは進歩的な言語に包まれた古い植民地主義的戦術である。

パレスチナへの正義なしにクィア解放は不完全

クィアの人々にパレスチナとの連帯がホモフォビアと並ぶことを意味すると言われるとき、私たちは戦略を認識しなければならない：それは**クィアの命を守ることではない**。それは**国家権力を守ること**である。

LGBTQ+解放が西側に属すると主張するのは間違っているだけでなく——危険である。歴史が示すように：

- ・ 同性愛はアラブまたはイスラムの社会で**犯罪化されなかった**、ヨーロッパの植民地勢力が法を強制するまで。
- ・ 家庭内暴力と婚姻強姦は近代深くまで**西側で法的保護された**。
- ・ 今日、**パレスチナのクィアはイスラエルから庇護を拒否され**、クィアのユートピアとして宣伝されながら。

米国でトランスを監視し、英国でクィアの庇護希望者を追放し、ガザの病院を爆撃するシステムは相互接続されている。クィア解放は反植民地主義的闘争から分離できない。それは慈善で

はない；それは集団的生存のための戦略である。

「私たちの解放は結びついている」とクィアの組織者は長く言ってきた。メタファーではなく、物質的現実として。

パレスチナを支持することはクィアのアイデンティティの矛盾ではない。それは成就である。クィアで反植民地主義的、クィアで反アパルトヘイト、クィアでプロパレスチナであることは偽善ではない。それは一貫性である。

真の連帯は私たちが誰であるかを否定することを求める。それは**権力者によって書かれたスクリプトを拒否すること**を求める——私たちのアイデンティティを分裂の道具にするもの。それはパレスチナのクィアに耳を傾け、彼らの複雑さのすべてで存在する権利を支持し、誰も追放されず、非人間化されず、尊厳を奪われない世界のために彼らと並んで闘うことを求める。

クィアの人々は昨日彼らを犯罪化し、今日トーケン化する帝国に忠誠を負わない。私たちはアイデンティティと原則の間で選ぶ必要はない。私たちは権力の小道具ではない。私たちは人々である。そして私たちは自由になる——一緒に。

参考文献

- Amnesty International. (2022). **イスラエルによるパレスチナ人に対するアパルトヘイト：残酷な支配システムと人道に対する犯罪.**
- alQaws for Sexual & Gender Diversity in Palestinian Society. **私たちの仕事.**
- Boswell, J. (1980). **Christianity, Social Tolerance, and Homosexuality.** University of Chicago Press.
- El-Rouayheb, K. (2005). **Before Homosexuality in the Arab-Islamic World, 1500–1800.** University of Chicago Press.
- Human Rights Watch. (2021). **A Threshold Crossed: Israeli Authorities and the Crimes of Apartheid and Persecution.**
- Massad, J. (2002). „Re-Orienting Desire: The Gay International and the Arab World.“ **Public Culture**, 14(2), 361–385.
- Palestinian Queers for BDS. (2010). **ピンクウォッシングに関する声明.**
- Pinkwashing Israel. **ピンクウォッシングとは？**
- Rahman, M. (2014). **Homosexualities, Muslim Cultures and Modernity.** Palgrave Macmillan.
- Royal Pardon for Alan Turing. (2013). **英国政府プレスリリース.**
- Turing, D. (2015). **Prof: Alan Turing Decoded.** The History Press.
- UNDP. (2021). **Being LGBTI in the Arab Region.**
- Whitaker, B. (2006). **Unspeakable Love: Gay and Lesbian Life in the Middle East.** University of California Press.